

## 中期ビザンティン・レクショナリー写本の挿絵研究序説

益 田 朋 幸

筆者は標題に関して、科研費による3年間の研究助成を得た。これを機会に、中期ビザンティン・レクショナリーの挿絵について、その全貌を見渡す論考を書き継いでゆきたい<sup>(1)</sup>。本稿は諸写本を具体的に論ずる前段階の、序論である。

### レクショナリーとは何か

ここで「レクショナリー lectionary」と呼ぶのは、正確には Gospel lectionary で、正教会<sup>(2)</sup>が日々の典礼で朗読する福音書の章句を、教会暦に従って編纂した書物である<sup>(3)</sup>。レクショナリーという書物の形式は、5世紀頃エルサレムで整ったと考えられている<sup>(4)</sup>が、ビザンティン世界で制作された現存する最古のレクショナリーは、9世紀を遡らない<sup>(5)</sup>。

ビザンティン時代にレクショナリーは Εὐαγγέλιον とのみ呼ばれていた。単純に「福音書」の意である。通常の(典礼用に編纂されたのではない)福音書とまぎらわしいため、今日では Εὐαγγελιστάριον と呼ばれる。ラテン語 Evangeristarium 経由で、ヨーロッパ諸語でも Evangeristary 等と称されることもある。一方マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書を一巻の写本としたものは、ビザンティン時代には Τετραεὐαγγέλιον (「四福音書」の意) と称され、今日では簡略化され Τετραὐάγγελο と通称される。レクショナリーは日本語で典礼用福音書抄本、日課書等と訳されるが、本稿ではレクショナリーの語を用いる。

アラントの『早見表』<sup>(6)</sup>によれば、世界中に現存する福音書関係の写本は断片を含めて3200点余である。パピルス写本は99点で、そのうち23点が四福音書。羊皮紙/紙写本のうち306点がマジュスキュール(大文字)により、2856点がミナスキュール(小文字)による。マジュスキュール写本の中で四福音書は20点余りであるが、ミナスキュール写本中1300点以上が四福音書である。ビザンティン写本の主流がマジュスキュールからミナスキュールに移行するのが10世紀前後であるが、これ以降福音書写本における四福音書の割合が格段に高まったことがわかる。換言すれば、福音書に使徒書簡や使徒言行録等のテキストが加えられることなく、四福音書のみをもって一写本とする傾向が、11世紀以降に高まったと言えるだろう。一方アラントが収載するレクショナリーは2403点、このうちのほとんどがゴスペル・レクショナリー、すなわち本稿が対象とする写本である。四福音書とレクショナリーと、どちらの数が多いかは一概には言えないが、ビザンティン

写本の世界で両者は他を圧する二大ジャンルであり、これらに次ぐジャンルは詩篇にせよ新約聖書にせよ使徒書簡にせよ、現存数においておそらく桁を異にする。

カーニヴァル期間	—日	税吏とパリサイの週（四旬節前の典礼 Triodion 開始）
	—日	放蕩息子の週
	—木	Tsiknopempti（肉を焼く煙の木曜——断食に先立って騒いで楽しむ日）
	—日	肉断ちの週
	—日	乾酪断ちの週
四旬節	—月	Kathari Deutera（清浄な月曜、四旬節開始）
	—土	聖テオドロス（移動祭日）
	—日	第一日曜 正教勝利の主日
	—日	第二日曜 聖グリゴリオス・パラマスの主日
	—日	第三日曜 十字架の主日
	—日	第四日曜 聖ヨハネ・クリマコスの主日
	—日	第五日曜 エジプトの聖マリアの主日
	—土	ラザロの土曜（キリスト復活に先立って、ラザロの蘇生を祝う。）
	—日	聖枝祭（エルサレム入城）
	—月～土	受難週間（聖週間）
五十日	—日	復活祭
	—月～土	光明週間
	—日	聖使徒トマスの週
	—日	携香女の週（キリストの墓に没薬の油を供えた聖女たち）
	—日	中風者の週
	—日	サマリアの女の週
	—日	瞽者の週
	—木	キリスト昇天
	—日	諸聖師父の週
	—日	五旬祭の週
—月	聖霊の日	

（訳語は正教会のものを使ったが、四旬節〔四旬祭〕と聖霊〔聖神〕は慣用による。）

表1 正教の典礼暦

レクショナリーの内容は大きく二部に分かれる。第一部は復活祭の日曜に始まり、聖土曜に終わる移動日課（復活祭前後の典礼暦は表1参照）の一年間のレクション（章句）を並べたもので、ヨハネ（8週間）、マタイ（16週間）、ルカ（17週間）、マルコ（6週間）の各部に細分される。四つの福音書は、それぞれの立場からイエス生涯の言行を語る。従って四福音書を通読する者は、類似の物語を四度繰返すことになる。レクショナリー第一部は、四つの福音書をいったん断片化した上で再構成し、イエスの生涯を一貫した語りの中に配置しようとする試みと解することができる。ただし受胎告知（3月25日）、降誕（12月25日）、神殿奉献（2月2日）、洗礼（1月6日<sup>(7)</sup>）

等の祭日は第二部固定日課篇に属するので、イエスの生涯を幼児伝から受難・復活にいたるまで、時系列で語り尽くすことは、原理上不可能である。

レクシヨナリー第一部は、断片化・再構成という編集作業にもう一つ制約を設けた。復活祭から始まる初め四分の一をヨハネから採り、次いでマタイ、ルカ、マルコ、と四人の福音書記者のオーダーを設定したのである。筋の都合上、他の福音書章句が必要な場合、ルカの部の中にマルコを採用する等は頻繁に行われる。ビザンティン世界一般に四福音書記者の中でヨハネを尊重する傾向が濃厚であるが、レクシヨナリーというジャンルにおいてその傾向が著しい。巻頭に配されるヨハネの記者肖像が、写本全体のフロンティスピースを兼ねることがしばしばあり、また最重要の祭日である復活祭がヨハネと結びついているからである。

第一部にはさらに *εωθινά* (単数形 *εωθινόν*) と呼ばれる章と、「我等が主イエス・キリストの受難の12のエヴァンゲリア」 *Εὐαγγέλια δώδεκα τῶν ἁγίων πάθων τοῦ Κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ* と通称される章が加わる。前者は主として朝の典礼で読まれる復活に関する11の記事<sup>(6)</sup>で、写本冒頭、末尾、第一部と第二部の間、等に配置される。この *Eothina* の位置によって、写本のリセンションがある程度推定できる可能性がある。後者「受難のエヴァンゲリア」は、イエスの十字架の上の死においてクライマックスを迎える物語を、四つの福音書によって構成したものの<sup>(9)</sup>で、聖金曜の朝<sup>オムトロス</sup> 課の前(すなわち聖木曜と聖金曜の間)に置かれる。これ以外に<sup>オーラ</sup> 時禱(第一・三・六・九時)のレクシヨン<sup>(10)</sup>等が聖金曜に加わる場合もある。

レクシヨナリー第二部は *Synaxarion* と呼ばれる、固定日課のためのレクシヨンを編集したものである (*Menologion*、*Menaion* とも)。9月1日に始まり、8月31日に終わるビザンティン暦の一年に従って、各日に記念される聖人の名と、福音書の章句が並ぶ。多くは殉教者、聖職者、神学者等の命日であるが、前述したようにキリスト、マリア、洗礼者ヨハネ等の特定の事跡を祝う日も混じる。365日すべてを収める写本は少なく、後半3月～8月は省略される日が多い。晩冬から春にかけては、四旬節と復活祭の典礼に忙しいためでもあろう。しかし原則は、第一部と第二部とによってビザンティン人の一年間が二度網羅される。ある任意の一日のレクシヨンは第一部移動日課と第二部固定日課とに見出される。

正教会の組織と神学には「正統」の意識が強く、聖人暦にヴァリエーションはないものと考えがちであるが、実態は必ずしもそうではない。無論重要な祭日はすべての写本に共通であるが、マイナーな聖人の祭日が食い違い、あるいはこの聖人を採り彼の聖人を捨てる点において、写本間に特性が生じる。挿絵の研究と並んで、聖人祭日のリストを分析することは、レクシヨナリー研究には必須の作業であるが、これについては紙幅を要するので別稿を用意したい<sup>(11)</sup>。

写本の末尾には、「様々な機会のエヴァンゲリア」 *Εὐαγγέλια εἰς διαφόρους περιστάσεις* が附録として設けられることがある。これは結婚、葬儀、誕生、洗礼、聖堂の奉献、地震等種々の出来事の際に教会で読まれるレクシヨンを指示するものである。福音書本文が書かれることはなく、

第一部、第二部のどこかを参照する形をとる。

365日を二度網羅するレクシヨンの量は龐大で、とうてい一冊の写本に収まるものではない。そこで様々な種類の省略が行われる。写本の制作者（注文者あるいは工房の写字生）は、ある種の意図をもってテキストや祭日を省略し、あるいは逆に強調することができる。この点については各写本を今後記述してゆく中で具体的に論じなければならないが、今は一般的に省略の方法について概述するのみとする。

日にちそのものを採用しない、というのが省略の方法の一つである。たとえば第一部第一章ヨハネの部では全日（日～土）のレクシオンを記載するが、第二章マタイ以降は土曜日曜のレクシオンのみを採用し、月～金のレクシオンを略す<sup>(12)</sup>。第二部シナクサリオンにおいては、ひと月のうち数日しか聖人の祭日を掲げないことがある<sup>(13)</sup>。省略法の第二は、参照記事をもって本文に代えるものである。写本の別の箇所すでにテキストが記されている場合は、重複を避けて「～参照」という指示のみに留める。第一部第二部を通して、重要な祭日にはオルトロス（朝課）とリトゥルギア（奉神礼）の二つ（時にはエスペリノス（晩課）を加えて三つ）のレクシオンが記載されるが、オルトロスのレクシオンは多くの場合参照記事のみである。第二部シナクサリオンは、8割方参照記事で事足りる。

省略が可能であることを逆に言えば、省略しないことが強調である場合があり得るということである。しかしこの点については、多数の写本のテキスト構成を比較しなければならない<sup>(14)</sup>。

テキストを省略するやり方や、省略の分量は様々で、まったく同一のテキストをもつレクシヨナリーは存在しないと言ってもよい。200フォリアに満たない薄い写本から、400フォリアを超す重厚な写本まで、厚さも多様である。一般に頁数の多いレクシヨナリーは実用向きで、薄いレクシヨナリーは修道院に対するプレゼントであったり、あるいは豪華な装幀をほどこして典礼の中でアイコン的に用いられることもある。

テキストの取捨選択は、レクシヨナリーの機能と関わるばかりでなく、制作者の特定の意図を反映する場合もある。制作者の信心する聖人の祭日をシナクサリオンに加えるのが、もっとも単純な例であろう。しかしそれが極めて特殊で、通常シナクサリオンに採用されないマイナーな聖人でない限り、「聖人の採用」は目立たない。彩飾や挿絵によってこれを強調すれば、制作者の意図はいっそう明らかになる。

シナクサリオンにおいて、もっとも制作者の姿が見えるのは、聖堂奉獻 *ἐγκαίνια* の記事である。これについては別稿で意を尽くしたいが、一例のみここに挙げる。パリ国立図書館 Cod.Paris.Coislin gr.31 は、5月16日 (f.265v) に *ἐγκαίνια τῆς Ἁγίας Δυνάμεως* との記事をもつ。したがってこの写本は *Agia Dynamis*<sup>(15)</sup> に献堂された聖堂または修道院のために制作されたものである。本写本には他にも、5月11日 (f.265v) 「首都<sup>ペリス</sup>の誕生」、7月2日 (f.272v) 「ブラケルネ聖堂への聖母のマフォリオン安置」、7月31日 (f.272v) 「ブラケルネ聖堂の献堂」等、

ビザンティン帝国の首都コンスタンティノポリスに関わる祭日を挙げている。故に、この写本はコンスタンティノポリスで制作され、おそらくはコンスタンティノポリスで使用されたものと考えられる。首都のアギア・ディナミス聖堂はコンスタンティヌスによって、ネオリオン港<sup>(16)</sup>近くに建立されたとの伝承をもつが、遺構は現存せず、これに触れた文献も少ない<sup>(17)</sup>。ジャンンは、10、11世紀頃までこの聖堂は存在したであろうと推測するが、本写本によって11、もしくは12世紀までアギア・ディナミス聖堂が活動を続けていたことが確実にわかる。コロフォンがなくとも、このような特定聖堂 encainia の記事によって、写本が使用された場が明らかになるのである。

後述するように、これまでのレクショナリー研究は、挿絵を単独に採りあげて図像学的に議論するのみであった。そのような方法では、写本の全貌が把握されないのみならず、パトロンの意図の解明、あるいは進んでパトロンの特定は不可能である。各写本のモノグラフ的な研究が必要である所以である。

### レクショナリーの挿絵

レクショナリー写本の中で彩飾以外の挿絵<sup>(18)</sup>をもつものは、それほど多くはない。挿絵入りレクショナリーのほとんどが、福音書記者像のみを描いている。ここまでは四福音書写本と並行する現象である（ただし記者のオーダーが異なっている）。福音書記者像に関しては、フレンドの研究<sup>(19)</sup>以降、系統的な言及はほとんどなされていない<sup>(20)</sup>。図像学的な細部に変化が乏しく、配置場所も一定している（レクショナリーであれば第一部ヨハネ・マタイ・ルカ・マルコの各章冒頭に配するか、あるいは4人揃えて写本冒頭に描く）。記者像のタイプとしては、9、10世紀の写本に立像が少なくないが、11世紀以降は圧倒的に坐像が主流となる。背景の建築、家具や文房具、記者の仕種等にヴァリエーションの余地がある程度である。ヨハネのみは神の声を聴いて、それを弟子プロコロスに口述する立像という図像をもち（「神学者ヨハネ」の銘）、他の3記者が坐像であっても、ヨハネのみこの立像で描かれることが多い。

レクショナリー写本における福音書記者像の問題にも議論の余地が大いにある<sup>(21)</sup>が、当面筆者はこれを対象とはしない。前稿「諸問題」で言及したように、大英図書館 Cod.Harley 5785（11世紀の豪華なレクショナリー）では、冒頭ヨハネ（欠損）-マタイ（f.66v）-マルコ（f.143v）-ルカ（f.187v）というオーダーを採用する<sup>(22)</sup>。ルカとマルコの順を入替える写本は他にも例があるが、ハーリー5785ではあえてルカの章開始部（f.104）に半頁大の装飾文ヘッドピースのみ置いて、ルカの肖像を描かず、eothinon（f.188、テキストはルカ）にルカ肖像を移している。1070年の年記をもつ首都の基準作例、パリ国立図書館 Cod.Paris.suppl.gr.1096も、ヨハネ（f.2）、マタイ（f.35v）、マルコ（f.78）、ルカ（f.101）のオーダーを有する。この写本冒頭のフロンティスピースには「田」の字型の枠に、左上ヨハネ、右上ルカ、左下マルコ、右下マタイが配されている。これをどの順で読んでも、レクショナリーのオーダーにも四福音書のオーダーにもならな

い。レクショナリーにおける福音書記者像の研究は、多数の作例がテキストの内容とともに詳細に紹介されて初めて、その端に就くことができる。

記者像以外の挿絵としては、キリスト伝のナラティヴな挿絵と、後半シナクサリオンに附される聖者・典礼に関する挿絵が挙げられる。キリスト伝挿絵をもつ写本はシナクサリオンにも挿絵を付すのが原則であるが、どちらに量的な力点をおくかは写本によって異なる。当然そこにはパトロン在意図が働いている可能性がある。筆者の知る限り、ソフィア大学附属イヴァン・ドゥイチェフ研究所 Cod.gr.D.157 は、後半シナクサリオンのみに挿絵をもつ唯一のレクショナリーである<sup>(23)</sup>。

ナラティヴなキリスト伝挿絵をもつ写本は、これまでの筆者の調査では、以下の19写本である<sup>(24)</sup>。

- ・パトモス島聖ヨハネ修道院 Cod.70 (10世紀、余白挿絵)
- ・サンクト・ペテルブルグ、国立図書館 Cod.gr.21 (10世紀、枠付き挿絵)
- ・アトス山ラヴラ修道院 Cod.A 86 (10世紀、余白挿絵)
- ・アトス山ラヴラ修道院 Skevophylakion 蔵写本 (11世紀、全頁大挿絵)
- ・アトス山イヴィロン修道院 Cod.1 (11世紀、全頁大挿絵)
- ・ワシントン、Dumbarton Oaks Cod.1 (11世紀、余白挿絵)
- ・ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Cod. M 639 (11世紀、コラム幅とイニシャルの挿絵)
- ・ヴァティカン図書館 Cod.Vat.gr.1156 (11世紀、全頁・コラム幅・余白等の多様な挿絵)
- ・アテネ国立図書館 Cod.190 (11世紀、イニシャルと余白挿絵)
- ・ヴェネツィア、Istituto Ellenico, Cod.gr.2 (11世紀、全頁・余白・イニシャル等の多様な挿絵)
- ・アトス山ディオニシウ修道院 Cod.587 (11世紀、全頁・半頁・コラム幅・余白・イニシャル等の多様な挿絵)
- ・アテネ国立図書館 Cod.68 (11/12世紀、全頁・コラム幅の挿絵)
- ・パリ国立図書館 Cod.Suppl.gr.27 (11/12世紀、コラム幅・イニシャル・余白の挿絵)
- ・アトス山パンテレimon修道院 Cod.2 (12世紀、全頁とイニシャルを中心にした挿絵)
- ・イスタンブール、総主教座 Cod.8 (12世紀、余白とイニシャルの挿絵)
- ・ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Cod. M 692 (12世紀、全頁・余白・イニシャルの挿絵)
- ・アトス山イヴィロン修道院 Cod.111m (13世紀、全頁・半頁・イニシャル・余白の挿絵)
- ・アテネ、ベナキ美術館 Cod.TA 318 = Προθήκη 30.5 (11世紀、余白に「ラザロの蘇生」、

「ゲツセマネの祈り」の挿絵)

- ・バルティモア、ウォルターズ・アート・ギャラリー Cod.W 535 (1594年、全頁大と枠入り挿絵)

これらの写本のいくつかは、彩飾の一部を除いて挿絵のほぼ全てが出版されているが、なお半数の写本は、挿絵の一部が紹介されたに留まる。挿絵が全て出版されていても、それは独立した絵画として論じられることがほとんどで、レクショナリーのテキストとの関わりで議論されることは稀である。「レクショナリー挿絵」という文脈で論ずるためには、写本全体のテキスト構成が不可分である。テキストの内容を含めて、写本の全貌が出版されているのは、ヴァティカン本、ディオニシウ本、ピアポント・モーガン本 M692の3冊に過ぎない<sup>(25)</sup>。

写本群全体を見渡して特徴的なのは、挿絵形式の多様性と、場面選択の不統一性である。ビザンティン・レクショナリー写本に関しては、福音書記者像以外の挿絵のつけかたに定型、標準形は存在しない。複雑な壁面構成をもつ聖堂壁画にさえ、共通する一定のプログラムは存在するのに、写本にある程度の定型が存在しないのは奇妙なことである。

挿絵の形式は、全頁大・半頁大・コラム幅の枠付き・余白・イニシャルを自在に使い分ける。全頁大・半頁大・コラム幅の三種に関しては、挿絵の大きさによって内容に位階性をつくる意味があるのは理解できるが、余白挿絵を採用するかどうかはいかなる基準によるものか<sup>(26)</sup>。イスタンブール本は余白とイニシャルの挿絵のみをもつが、こうした形式の選択には、パトロンの意志だけでなく、写本工房と挿絵画家<sup>(27)</sup>の連携方法も関係するのかも知れない。余白挿絵は一般に対応するテキストの近くに描かれ、テキストとの密着の度合いが強いが、ヘッドピースとなる枠付き挿絵は、典拠となるテキストから離れる場合がある。その一方で、直近のテキストをあえて挿絵化することによって、その後に来るより重要な事件を逃すことも少なくない<sup>(28)</sup>。

聖堂装飾であれば、11、12世紀はまさに十二大祭のサイクルが形成される時期に当たり<sup>(29)</sup>、典礼との密接な関係の下、キリスト伝の基本的なサイクルが定まってゆくのに、より典礼と近い関係にあるレクショナリーでは、キリスト伝場面の選択にまったく基準が存在しない。四福音書がキリストの生涯を四度反復するのに対して、レクショナリーはそもそも、断片化-再構成という過程を経て、首尾一貫したキリストの生涯の物語をつくらうとするジャンルであった。それなのに、一冊のレクショナリーにおいて、過不足ないキリスト伝サイクルが描かれた例はないのである。放蕩息子のサイクルに執着を見せるかと思えば、重要な受難伝の場面が欠けている。

挿絵における場面選択の偏りは、パトロンの意図によって説明できるであろうか。こうした問題意識の下に、今後各写本の記述を踏まえて、「挿絵入りビザンティン・レクショナリーとは何か」ということを考えたい。コロフォン等の文字情報がない場合、挿絵の図像学的分析から得られる情報がパトロンを特定するほとんど唯一の手がかりとなる。筆者はかつてディオニシウ本に

関して、具体的なパトロンを指摘したことがある<sup>(30)</sup>が、これは幸運な例である。パトロンの固有名詞にまでは至り得ず、条件の確定に留まることも多いだろう。あるいは「挿絵のプログラムには、パトロンの特定の意志は反映されていない」という結論が出ることも予想される。こうしたネガティブな結論は、通常論文の対象とはならないものである。しかし上掲19冊ないし17冊と、その周辺の写本の分析という手順を踏まなければ、中期ビザンティン・レクショナリーに挿絵を付す行為の全貌は、決して見えてこないのである。

## 註

- (1) これまでに筆者が公にしたレクショナリーに関する研究は、以下の通り。*Εικονογράφηση του χειρογράφου αριθ.587 της Μονής Διονυσίου στο Άγιο Όρος* —— *Συμβολή στη μελέτη των Βυζαντινών Ευαγγελισταρίων* (『アトス山ディオニシウ修道院写本587番の挿絵——ビザンティン・レクショナリー研究への寄与』) (博士論文) テサロニキ大学、1990年12月；「ディオニシウ・レクショナリーの受難週挿絵における典礼的性格」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第18集 文学芸術編 1991年, pp.103-112；「ディオニシウ・レクショナリーの寄進者——十一世紀コンスタンティノポリスにおける女性のパトロン活動」『美術史研究』30 (1992), pp.51-66；「ビザンティン写本挿絵におけるヨハネ福音書冒頭部分の絵画化」『美學』172(1993), pp.12-22；“Picturization of John 1:1-18 in Byzantine Manuscript Illustration,” *AESTHETICS* 6(1994), pp.59-72；「天理図書館所蔵のビザンティン・レクショナリーについて」『ビブリア』103 (1995年5月), pp.198-175；「ビザンティン・レクショナリー写本研究の諸問題」『ビブリア』105 (1996年5月) [以下「諸問題」と略して引用], pp.232-206；「ビザンティン皇帝アンドロニコス二世のレクショナリー」『鹿島美術研究 (年報別冊)』13 (1996), pp.132-40；「イワン・ドゥイチェフ研究所 (ブルガリア) のビザンティン・レクショナリー」『女子美術大学研究紀要』31 (2001) [以下「ドゥイチェフ研究所」と略して引用], pp.1-10.
- (2) カトリック教会にもレクショナリーは存在するが、正教会とカトリック教会では典礼の差もはなはだしく、本稿では触れない。
- (3) レクショナリーにはゴスペル・レクショナリーの他、福音書以外の新約の章句を編んだ Praxapostolos、旧約諸書の章句を編集した Prophetologion 等があるが、現存する写本数が圧倒的に少なく、美術史的な研究対象とはならない。
- (4) *Oxford Dictionary of Byzantium*, p.1201, s.v. 《Lectinary》 by R.F.Taft.
- (5) 彩飾・挿絵のある写本は K.Weitzmann, *Die byzantinische Buchmalerei des 9. und 10. Jahrhunderts*, Berlin 1935. におおよそ採録されている。
- (6) K.Aland, *Kurtsgeffaste Liste der griechischen Handschriften des neuen Testaments*, Berlin/New York 1994<sup>2</sup>.
- (7) この日、ローマ教会は公現として「マギの礼拝」を祝うが、正教会は Theophaneia としてキリストの

洗礼を記念する。

- (8) 第一：マタ28:16-20、第二：マコ16:1-8、第三：マコ16:9-20、第四：ルカ24:1-12、第五：ルカ24:12-35、第六：ルカ24:36-53、第七：ヨハ20:1-10、第八：ヨハ20:11-18、第九：ヨハ20:19-31、第十：ヨハ21:1-14、第十一：ヨハ21:14-25。
- (9) 第一：ヨハ13:31-18:1、第二：ヨハ18:1-28、第三：マタ26:57-75、第四：ヨハ18:28-19:16、第五：マタ27:3-32、第六：マコ15:16-32、第七：マタ27:33-54、第八：ルカ23:32-49、第九：ヨハ19:25-37、第十：マコ15:43-47、第十一：ヨハ19:38-42、第十二：マタ27:62-66。
- (10) 第一時：マタ27:1-56、第三時：マコ25:16-41、第六時：ルカ23:32-49、第九時：ヨハ19:23-37。
- (11) 益田朋幸、海老原梨江「中期ビザンティン挿絵入りレクショナリーの聖者暦」『地中海研究所紀要』（早稲田大学）3(2004) [近刊]。註1のいくつかの拙稿も参照。
- (12) 首都の大聖堂アギア・ソフィアですら、経済的な理由で土日にしか典礼を行わなかった時期が長い。まして小さな修道院や聖堂では週末以外の典礼は不要であっただろう。
- (13) 任意の一例を挙げれば、Cod.Paris.Coislin gr. 31では、2月の祭日は1日トリフォン、2日神殿奉献、3日シメオンとアンナ、16日パンフィロス、24日洗礼者の頭部発見の5日を収録するのみである。3月は5日間、4月は7日間、5月は13日間、6月は11日間、7月は12日間、8月は3日間を採用している。並行現象はシメオン・メタフラステイスが編纂した聖者暦 Menologion においても見受けられる。全テキストの四分の三が9月～1月に集中する。N.Patterson Ševčenko, *Illustrated Manuscripts of the Metaphrastian Menologion*, Chicago 1990, pp.5f.. レクショナリー挿絵は、当然聖者暦写本から影響を受けていようが、この問題は未開拓の領域である。
- (14) 拙稿「ドゥイチュェフ研究所」p.8 に述べる Cod.gr.272 の例を参照のこと。
- (15) 聖女の名でもあり得るが、この場合は神の力の意。アギア・ソフィアが神の叡智、アギア・イリニが神の平和に献堂されたのと同断。
- (16) R.Janin, *Constantinople byzantine*, Paris 1964, pp.235-6.
- (17) R.Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin. 1er partie: Le siège de Constantinople et le patriarcat oecuménique, t.III, les églises et les monastères*, Paris 1969, p.101.
- (18) 筆者はかつて彩飾を含めたレクショナリー挿絵の分類を試みた。「諸問題」pp.221-219.
- (19) A.M.Friend, Jr., "The Portraits of the Evangelists in Greek and Latin Manuscripts," *Art Studies* 5(1927), pp.115-47; 7(1929), pp.3-29.
- (20) I.Spatharakis, *The Left-Handed Evangelist*, London 1988. は後期ビザンティン写本に現れる特殊なイコノグラフィーを論じている。
- (21) たとえばアトス山のレクショナリー写本をまとめて論じたカダス (Σ.Καδάς, "Η εικονογράφηση των ευαγγελισταρίων του Αγίου Όρους," *Αφιέρωμα στη μνήμη Στυλιάνου Πελεκανίδη*, Thessaloniki 1983, pp.54-67) は、ヨハネ・マタイ・ルカ・マルコのオーダーを採らない挿絵をいくつか挙げており、

特殊な典礼との関わりが想定される。カダス論文の内容については拙稿「諸問題」pp.226-224. 参照。カダスは写本の本文構成を挙げていないので、これ以上の議論はできない。「アトスのレクショナリー」ということに何らかの特殊な意味があるのかどうか——アトス典礼がコンスタンティノポリス典礼と異なるのかどうか——については、我々は十分な材料をもっていない。

(22) 「諸問題」p.224.

(23) 「ドゥイチェフ研究所」, pp.2-5, 7-8. 参照。9月1日柱上行者聖シメオンの挿絵は、以下にカラーで紹介されている。『9世紀-19世紀 バルカン古典文字展——ブルガリア文化フェスティバル』1997年11月日本書道美術館、p.20. pp.75-6の解説において、A.Džurovaはこの写本を（おそらくマジュスキュールの書体を根拠に）首都のストゥディウ修道院に帰しているが、根拠に乏しい。ストゥディウ修道院の写本工房が制作した写本については、やや内容が古い以下を参照。N.Ε.Ελεόπουλος, *Η βιβλιοθήκη και το βιβλιογραφικόν εργαστήριο της μονής των Στουδίου*, Athens 1967.

(24) 文献については「諸問題」註48-66を参照。ベナキ本、バルティモア本W535の2冊を除いた17写本については、拙著 *Εικονογράφηση* (註1) 附録 pp.213-44に挿絵のリストを収録した。ただし筆者未見の写本が多く、テキストの全貌を検討するには至っていない。ベナキ本は挿絵が受難伝の2場面に限られており、バルティモア本W535はポスト・ビザンティン写本であるので、「キリスト伝挿絵のレクショナリー」として重要なのは、残る17写本である。バルティモア本W535はしかしながらビザンティン時代の写本が予想される点で重要ではある。

(25) M.-L.Dorezal, *The Middle Byzantine Lectionary: Textual and Pictorial Expression of Liturgical Ritual*, diss., University of Chicago 1991; Masuda, *Εικονογράφηση*; J.C.Anderson, *The New York Crusiform Lectionary*, Pennsylvania 1992.

(26) 貴族詩篇（全頁大挿絵）と修道院詩篇（余白挿絵）と通称される詩篇写本群は、レクショナリーの並行現象とはならない。レクショナリーにおいては両形式が1写本に併存することが多く、さらにその中間的な形状の挿絵も多い。全頁大挿絵詩篇に見られるような、プログラムの一貫性は無論存在しない。詩篇写本の問題に関しては、以下等を参照。A. Cutler, *The Aristocratic Psalters in Byzantium*, Paris 1984; Ch.Walter, *Prayer and Power in Byzantine and Papal Imagery*, Aldershot 1993.

(27) 通常挿絵画家は写本工房の外にいて、工房から注文を受ける場合が多かったと考えられるが、ビザンティン写本の制作システムはほとんど不明である。Cf. S.Dufrenne, "Problèmes des ateliers de miniaturistes byzantins," *XVIIe congrès international d'études byzantines*, Akten I/2 (= *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik*, 31/2 (1981)), pp.445-70; J.C.Anderson, "Cod.Vat.Gr.463 and an Eleventh-Century Byzantine Painting Center," *Dumbarton Oaks Papers* 32(1978), pp.175-96.

(28) 挿絵に直近のテキストが図像化される現象は、四福音書写本と併せて考察されなければならない。四福音書中に、重要なキリスト伝以外のヘッドピースを有する一群の特殊な写本が、メレディス以来多数指摘されている。C.Meredith, "The Illumination of the Codex Ebnerianus: A Study in Liturgical Illustration

of the Comnenian Period,” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 29 (1966); Χ.Μαυροπούλου-Τσιούμη, “Εικονογραφικά θέματα από τον κώδικα αρ.762 της Μ.Βατοπεδίου”, *Κληρονομία*, 6-B (1974), pp.357-79; K. Benda, J. Myslivec, “The Illuminations of the Codex Mavrocordatianus,” *Byzantinoslavica*, 38 (1977); R.S.Nelson, *The Iconography of Preface and Miniature in Byzantine Gospel Book*, New York 1980; Στ.Παπαδάκη-Ökland, “Ένα εικονογραφημένο Τετραευάγγελο του 12ου αιώνα στο Βυζαντινό Μουσείο Αθηνών,” *Δελτίον της Χριστιανικής Αρχαιολογικής Εταιρείας*, 4-10(1980-81); Φ.Κωνσταντίνου, “Ο λειτουργικός χαρακτήρας των μικρογραφιών μίας ομάδας μεσοβυζαντινών τετραευαγγελίων με άφορμη τον κώδικα αριθ.274 της μονής Αγίου Ιωάννη του Θεολόγου της Πάτμου”, *Δεύτερο συμπόσιο βυζαντινής και μεταβυζαντινής αρχαιολογίας και τέχνης*, Athens 1982.

これら一群の四福音書写本中、もっとも重要な挿絵をもち、かつレクシヨナリーと密接な関係にあるのは、パルマ、バラティーナ図書館 Cod.gr.5 (『パルマ福音書』)である。この写本については、桜井夕里子が挿絵の分析からバトロンの可能性を議論している。桜井夕里子『『パルマ福音書』キリスト伝挿絵の図像プログラム』『美術史』157 (2004年10月)。

(29) E.Kitzinger, “Reflections of the Feast Cycle in Byzantine Art,” *Cahiers archéologiques*, 36 (1988), pp.51-73.

(30) 註1の諸論文参照。

本稿は平成16年度科学研究費補助金基盤研究C-(2)「ビザンティン典礼用福音書写本挿絵の総合的研究」の成果である。